

実は小さな、「高い壁」を越えて

埼玉県立浦和第一女子高等学校 2年 榊 真央

私は、16歳の春、ドナーになった。ドナーというと、臓器や骨髄を提供する人を思い浮かべるかもしれないが、私が提供したのは髪の毛である。私は「ヘアドナー」になったのだ。

今、ヘアドネーションという活動を知っている人はどれくらいいるのだろうか。ヘアドネーションとは、病気やその治療、不慮の事故によって髪の毛を失い、ウィッグを必要とする子どもたちに、医療用ウィッグの原料となる髪の毛を寄付する活動のことだ。これは、JHDACというNPO団体が中心に行っている。私たちは、切った髪の毛をJHDACに送付することで参加できる。また、この活動の賛同美容室では、カットから郵送まで行ってもらえるところもある。31センチ以上の長さを切ることができれば、年齢や国籍問わず誰でも寄付することができる。

私は、ヘアドネーションの活動をテレビを通して知り、高校生になった頃から参加してみたいと思っていた。それから髪を伸ばし続けて、31センチ切れるようになった高校2年生になる前の春休みに髪を切りに行った。そのときは、一緒に髪を伸ばしていた姉と2人で寄付に参加した。

実際に切ってみると、31センチは正直意外と長く、思っていたよりも私の髪は短くなった。ショートカットにするのは8年ぶりだったので、少し恥ずかしかった。けれども、切った毛束を持って、見たとき、恥ずかしさを忘れるくらいの、ずっとずっと大きな誇らしさがあった。これが病気などと闘っている子の笑顔につながるのかもしれないと思うと、とてもうれしかった。

カットが終わり、きれいにセットされていく自分の姿を見てふと思った。私にとってヘアアレンジを楽しむことは特別なことではないが、それがしたくてもできない同世代の人がいるのだと。それと同時に、こんなに小さなことで力になれるのなら、もつとこの活動が広く知らなければいけないような気がした。寄付に協力する人を増やすためには、当たり前ではあるが、まず活動を詳しく知ってもらう必要がある。そして「寄付」と言っても、思っている以上に簡単にできることをわかっただけだと思ってしまう。それは、実際に活動に参加した私のような人たちの、参加後に残された役割でもあると感じる。

私は、髪を切った後、何人もの友人に声をかけられた。そんなとき、私は髪をバツサリ切った理由として、この寄付活動に参加したかったからという話を話した。それは、私にとって、自慢なことではなく、本当の理由であり、またそれを聞くことによって、興味を持ってくれる人が出てきてくれたらうれしいと思った。実際、私の友人の1人が興味を持って、どのような手順をふめば参加できるのかを聞きに来てくれた。その友人は寄付に参加すると言った。こんな風にして、あちらこちらでまた支援の輪が広がっていきよければよいと思った。

社会貢献という言葉は、なんとなく難しく聞こえてしまいがちであると思う。特に高校生である私たちにはなおさら高い壁のように感じられるかもしれない。けれども、難しいことばかりではないと今回の体験を通して感じた。事実、私がしたのは美容室に行き、髪を切ってもらっただけのことである。もちろん、そこには活動に賛同し、カット・送付を請け負う美容室があつたことだが、それは手軽に参加できる手立てがあるということでもある。私たちは、考えるのが難しいから、高い壁のように感じられるからなどと言って自ら社会貢献という言葉を遠ざけてはいけない。手立てはあるのだ。たしかに、災害の起きた被災地に行ったり、何か催し物に参加したりしてのボランティア

ア活動は、移動や安全面を考えると学生ではしづらいいし、募金といっても、そう頻繁に、また、そう多額のものではない。しかし、そう気負わなくても、普段していることに少しプラスのことをするだけでも役立つことだってある。私はそれを心がけることにした。参加したいと思う募金をレジの横で見つけたときは、1度にたくさんのお金を入れることはできないので、来たときには必ず10円ずつ入れるなどしている。自分のできる範囲だけでも、少しの工夫や、「少しずつ」の継続が、支援、貢献につながれば、と違って心がけている。もっと探していけば、私たちの周りにはできることがまだまだあるはずだ。

社会貢献は高い壁ではない。私たちが想像して作っているだけで、それほど大きいものではないと思うのだ。そんなことを思いながら、私は、次31センチ切るまでには何年かかるのだろうかと考え、楽しくなるのである。

